

特集 近年の主要病害虫の発生の特徴と対応

近年の主要病害虫の発生の特徴と対応

近年、温暖化、集中豪雨、干ばつ等の気候変動が大きくなる傾向があり、それに伴い病害虫発生の年次変動が大きくなっている。また、防除には化学合成農薬にできるだけ依存しない環境創造型農業が望まれている。そこで最近、野菜等で発生

が目立つ病害虫の特徴とその対応について紹介する。

前川 和正（病害虫部）
（問い合わせ先 電話：0790-47-2447）

水稻主要病害の発生の特徴と対応

イネいもち病は県南部中山間地の普通期栽培を中心にやや発生が多く、確実な種子消毒、抵抗性誘導剤の育苗箱施用が重要である。紋枯病は県南部の普通期栽培を中心に発生し、秋期の耕うんや有効剤の箱施用が重要である。

内容

いもち病（表紙写真）については県南部を中心に作期が長い普通期栽培が増加し、特に中山間地では出穂前の局地的な降雨により感染、発病が見られる。いもち病は種子伝染するため、購入による種子更新と適切な種子消毒が重要である。種子消毒はペフラゾエート乳剤等の効果が高いが、更に防除を徹底する場合は、種子内部まで殺菌力のあるベノミル水和剤で処理を行う。温湯種子消毒を行う場合には、処理後の再汚染に注意が必要である。育苗箱施用では、移植時に施用する抵抗性誘導剤のプロペナゾール粒剤、イソチアニル粒剤が有効である。これらは移植後60日頃に効果が減退するため、特に作期の長い普通期栽培では、出穂前にフサライド・フェリムゾン粉剤等で上位葉の葉いもちを防除する。

紋枯病については県南部の普通期栽培を中心に発生が見られる。本田に残った菌核が代かきで浮遊し、株元に付着して感染が起こるため、秋期の耕うんによる密度低減が有効である。防除は箱施薬剤のチフルザミド粒剤やフラメトピル粒剤は長期残効があり、有効である。

稲こうじ病は、普通期栽培で増加傾向にある。

土壌中に残った厚壁胞子が伝染源となることから、発生が多い圃場で常発する。穂ばらみ期の幼穂に感染、発病（写真）するため、防除は出穂20-10日前頃にシメコナゾール粒剤又は銅剤を散布するのが有効である。

今後の方針

いもち病について、化学合成農薬を使用しない種子消毒や高温加湿空気を用いた新しい物理的な防除方法を検討する。

内橋 嘉一（病害虫部）
（問い合わせ先 電話：0790-47-2448）



写真 穂に発生した稲こうじ病（矢印）